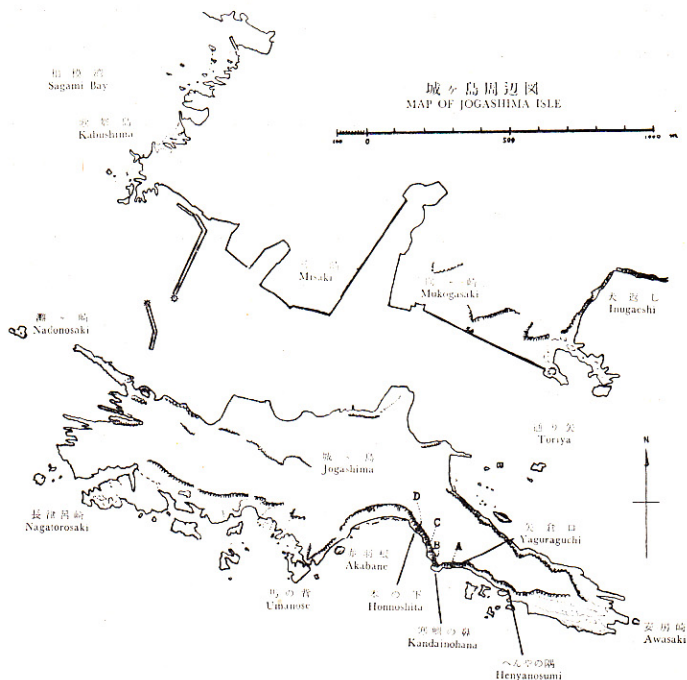


## 城が島のクロサギとその蕃殖について

柴田敏隆\*・金田平\*\*

城が島は三浦半島の南端、三浦市三崎港に対して丁度天然の防波堤のように横たわる、東西2100m、南北700mの細長い島である。



この島にクロサギ *Demigretta sacra ringeri* STEINER が棲息することは既に1924年2月23日、黒田長礼氏によって記録されているが、1957年1月24日には A. E. ARONFF 氏によって2羽のクロサギが観察され、以後1957年6月には同氏によって2羽の巢立雛を連れた親仔計4羽が観察され、雛の發育状況からして城が島で蕃殖したものではないかと推定されるに至った。

これより先、城が島漁業組合長染羽彦十郎氏によると、1924年頃、東京の某大学より採集者が来て島にいる多数の鳥を採集して持ち帰った。その中に灰色のサギがいたのでその名を尋ねた処、ゴイサギと答えたので以後その鳥をゴ

イサギと信じて今日迄ずっと観察し続けた。ARONFF 氏の見た鳥がクロサギならば自分の観察し続けた「ゴイサギ」こそクロサギに違いないと、1924年黒田氏の採集以後もずっと城が島にクロサギの棲息することを認めている。

筆者等は ARONFF 氏の教示を受けて1957年以降引続き城が島でクロサギの観察を続けて来たが1958年5月には4巢を発見しその蕃殖を確認したので以下その状況を記述する。

**棲息環境** クロサギの棲息地は城が島の中央南面、赤羽根海岸より東側の本の下、寒鯛の鼻、矢倉口、へんやの隅を連ねる標高約30mの断崖周辺で、この断崖は海面より屹立し寒鯛の鼻の一部以外は海上から舟を用いる以外人間の接近の不可能な峻峻である。海面より20m位は金田層に属する岩壁露出し、冬季は2000羽に達するウミウ及びヒメウの群の塹となる為、崖は之等の鳥の排泄物でほとんど常時白く彩られている。この岩壁より上は30度位の斜面で処々関東ロームが露出し、その表面はハチジョウススキ、アズマネザサ、トベラ、ハマボウフウ、イソギク、ツワブキなどの群落で被われている。(Fig. 3)

この崖の前面の海は沖合200m位迄比較的浅くぼうちょう(視突)漁の好漁場となっている。

**一般的習性** ここに棲むクロサギは常時寒鯛の鼻、又は本の下断崖の略々中央にある鳩の巢と称する巨大な割れ目を拠点として、早朝日の出少し前より活動を始め、終日附近の岩礁上を点々と渉り歩き、(Fig. 7)時には断崖の中央部に佇立して休憩し、日没後薄暗くなる頃迄採餌して、矢倉口附近の海蝕洞や鳩の巢の割れ目の奥を塹として夜間の休眠に入る。この塹はほとんど一定して

附近の岩上はクロサギの排泄物で白くなっている。

採餌の際に遠出することも屢々で、この場合は一度沖合に飛出して海岸より100m位へだたった海面を低くゆっくり羽擲き、東側は安房崎を廻って通り矢から対岸の犬返し方面迄、西側は馬の脊を廻って長津呂、灘の崎方面から遠く諸磯方面迄が行動圏内に入る模様である。飛翔の際陸上を飛ぶことは極めて稀で又非常に警戒心が強く遠くから人の接近を感知する。之も土地の漁師に対しては比較的警戒心がうすいようである。警戒を始めると多くの場合、首を心もちのぼし加減の姿勢で一瞬の間に動作を停止して身じろぎもせず、いよいよ危険が迫ると多くの場合は遠くからいちはやくゆっくりした動作で飛び立つが突然身近かに外敵が接近した場合などは驚く程の素速やさで飛立ち、安全圏内に至ると始めて例のクロサギ特有の緩慢な飛翔に入る。飛翔の初期は首はのぼし気味で緩慢な翼動による飛翔態勢に入ってから首を乙字状に縮める。飛立った直後脚は斜後下方に垂れ流すが、完全な飛翔態勢に入ったときは脚は水平に近く後方に充分のぼし尾羽の先端から跗蹠及び趾が突出し上方から見た場合著しく黄色味を帯びて見える。脚を充分に後方にのぼす方が首を乙字状に縮めるより先に行われるのが普通で近距離では首をのぼしたまま飛翔することも多い。

時期によって個体数に多少の増減が認められる、即ち1957年12月29日、4羽。1958年1月10日、7羽。同2月8日、1羽。2月9日、4羽。4月9日、5羽。4月19日、5羽。4月29日、3羽。5月5日、5羽。5月13日、5羽。5月21日、5羽。7月24日、4羽。11月23日、10羽。11月29日、10羽。で蕃殖期の4~6月には常時5羽棲息していたものと思われる。

**蕃殖状況** 1958年4月10日、柴田は鳩の巢東側の割れ目にC巢を発見した。(Fig. 3) この巢は海面より約7mの高さ、西方を向いた狭い縦の割れ目で巢材の一部が約100m離れた崖上より双眼鏡にて認められた。巢材はかなり多量らしく、割れ目の外にもはみ出し、垂下しているのが認められた。巢の前面には排泄物が認められ、出入する1羽のクロサギを観察した。

1958年4月19日には営巢、抱卵の様子は全く認められず放棄したものと思われた。この日同行の小粥康治、伊達睦の両氏は寒鯛の鼻西側の懸崖に巢材を運ぶ2羽のクロサギを発見した。B巢である



Fig. 1. D巢のある大きな岩の割れ目 (矢印は巢の位置を示す)  
A large break, in Which is nest D.  
(The arrow indicates location of nest.)

(Fig. 5) この巢は絶壁の海面から高さ約7m、壁面に突出した小さな岩棚の上であり、全く接近不可能な場所であった。巢はまだ僅かの巢材しか見られず営巢を開始したばかりのものであった。

4月29日にはB巢の上で交尾するクロサギの雌雄を観察した。交尾は巢の端に立つ雌の脊に雄が羽擲きながらまたがり比較的短時間で終わった。交尾の前後に特に著しいDisplayを認めなかった。巢は完成し、産卵も行われたらしく、雌と思われる1羽は交尾後も巢にうずくまって抱卵を続けていた。正確な卵数は不明であったが、約200m離れた赤羽根海岸より、天体望遠鏡にて、2乃至3個の淡青色の卵と思われるものを認め、また時折、親鳥が立上って脚で卵の位置を変えるような動作を行うのも観察した。

観察中は抱卵の為に雌雄交代することを認めなかった。雄と思われる1羽は常時巢の近くの岩壁上に止っていた。

5月13日、金田は巢材を採集するところを観察した。即ちD巢の上方、草つきがロームの露出部で終る場所附近の海浜植物の根若しくは枯枝を1羽のクロサギが嘴でくわえ、強く引張り、それでもとれないので

次には嘴でしっかりとくわえたまま身を投げるように崖に吊り下って翼をばたばたさせ、自らの体重で引き落そうとするかのような動作を何回も繰り返した。これから見ても巣材は陸上から求めるらしく、後述のA巣に新鮮なツワブキの葉があったことなどからも考えられる。又、抱卵中にも絶えず巣材の補填並びに巣の修復を行うものと思われる。

1958年5月21日にはD及びA巣を発見した。D巣は本の下断崖の赤羽根海岸寄りにある高さ約20mの岩の縦のひび割れの海面より約5mの高さにあり、入口は南南東の方角を向き、C巣の様式と似たものであった。(Fig. 1, 2) 即ち岩の割れ目の比較的中広い場所に巣材を多量に押し込んだ未完成のもので、以前はこの附近へのクロサギの出没を余り認めなかったのに当日は1羽のクロサギが警戒していたのでごく最近のものと思われた。しかしこの巣はその後放棄されたらしく、それ以上営巣の進捗を見なかった。この日の午後、へんやの隅断崖にある海蝕洞でA巣を発見した。この巣は海面より約5mの高さにある入口の中3m高さ4m奥行4m程の東南向の海蝕洞の入口より約1m離れた東側隅にある凹地にあり、抱卵中の3卵を認めた。(Fig. 4, 6, 8) 撮影のみ行って早々に立退いたがその直後子供達に発見され悪戯されたらしく、その後2卵は破壊され、完全な1卵を残して抱卵は中絶、巣は放棄されたことを染羽氏から聞いたので残された卵を回収し巣の計測を行った。

巣の外径 38×32 cm

産座径 13×17 cm

卵 A 46.?<sup>?</sup>×32.?<sup>?</sup> mm (破 損)

B 42.6×33.2 mm (一部破損)

C 44.8×33.0 mm

巣材 ハチジョウススキ、アズマネザサの茎、イソギクの根、他にツワブキの生葉が一本入っていた。

巣は地上の凹部にアズマネザサ、ハチジョウススキの茎、イソギクの根などを粗雑に敷いたもので外部にツワブキの新しい葉が1枚(葉柄とも)あった以外は皆良く乾燥したものばかりであった。(Fig. 8)

今回観察したA B C D 4巣の中、A, Bの2巣は岩上の平坦部に巣材も少なく、比較的粗雑に作られており、靱山徳太郎(1922)山階芳麿(1941)氏等の記載と略々等しいが、C, Dの2巣は岩壁の縦の割れ目にあって、多量の巣材を集積しており他の2巣とは違って小林平一、鳥居主計(1954)両氏の観察と一致している。

卵の大きさについては城が島の3卵と従来報告された経島附近7卵(小林、鳥居)、西表島3卵(山階)、石垣島4卵(山階及び Jourdain)及びナンヨウクロサギ *Demigretta sacra sacra* についてのポナペ島1卵(山階)、ヤップ・ガリム礁5卵(靱山)、インド産平均(Baker)の各測定値に依る各地区毎の Size Index の相加平均値を比較してみた処、経島附近1551.4、西表島1518.8、石垣島1591.3、ポナペ島1825.0、ヤップ・ガリム礁1516.0、インド産平均1491.8、城が島1454.9と城が島のものは小柄のようであった。Shap Index については各地区でも個体によって極めてまちまちで特に城が島のものの卵形について一傾向を認めることは出来ないようである。之等A B C D 4巣の中、この蕃殖期に完全に蕃殖し終えたのはB巣のみで、巣立日は確認し得なかったが染羽氏の観察によると6月10日前後、雛は2羽とのことであった。

1958年7月24日の観察ではB巣の親仔と思われる成鳥2羽、幼鳥2羽をB巣の附近で認めたが、この雛はもう親と同じ位に成長し、活潑に飛び廻っていた。B巣は既に跡形もなくなっていた。

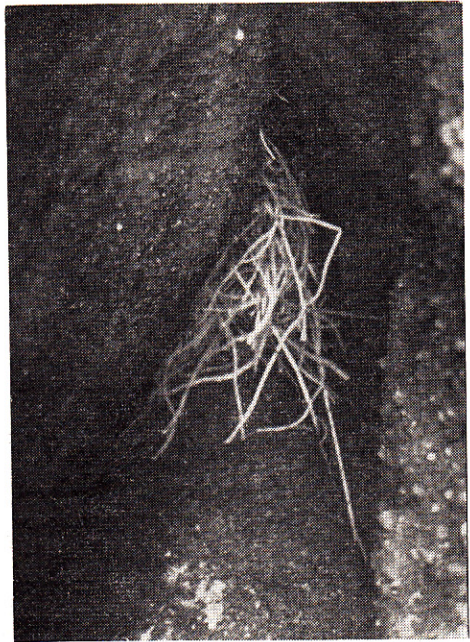


Fig 2. D巣 Nest D.

以上筆者等の観察の外に、城が島の自然を詳しく観察し刻明に記録している染羽氏によると、3月上旬、鳩の巢の割れ目にクロサギと思われる巢があった。4月中旬、同所にて雛を認めた。5月6日、矢倉口海蝕洞に生毛がはえ皮膚の裸出した雛が3羽いた。5月30日、同所で巢立雛3羽の出入を認めたとのことであるが筆者等の観察と一致しないので詳細は不明である。

城が島のクロサギ棲息地は戦前は軍の要塞地帯として女子供以外は地元の男子も立入を禁止され、戦後も最近の観光ブームに至る迄人跡も稀で、ここに年々クロサギが棲息し続けたことは充分推測し得ることである。毎年6月1日よりテングサ採取が解禁となり島の人々がクロサギの棲息地内で終日作業するようになる。この時期に南風が卓越し、海が荒れるとこの棲息地への立入は全く不可能となるので6月上旬の気象条件がクロサギの蕃殖に及ぼす影響は軽視出来ないものと思われる。

城が島におけるクロサギの蕃殖は1958年5月5日、神奈川県真鶴半島にて田代道弥、杉崎一雄両氏によって発見されたクロサギの巢(発見当時4卵、その後蕃殖は中絶したといわれる。—未発表—)と共に本州におけるクロサギの蕃殖の北限の一例となるものである。

本稿を草するに当って終始調査に同行協力援助を頂いた。小粥康治、伊達睦の両氏、城が島漁業組合長、染羽彦十郎氏、色々御教示を頂いた米海軍々医 Arthur. E. ARNOFF 博士、朝日新聞社石毛良雄氏、調査への便宜を与えられた横須賀市博物館長羽根田弥太博士、貴重な写真を提供された村山健治氏及び文献の閲覧を許された山階鳥類研究所の各位に対して厚く御礼申し上げます。

### 参 考 文 献

- ARNOFF, A. E. 1958. On the Reef Egret, *Demigretta Sacra ringeri* STEJNEGER from Jogashima Isle, Miura Peninsula, Japan. Sci. Rep. Yokosuka City Mus. (3): 14~15.
- AUSTIN, O. L. Jr. and KUFODA, N. h. 1953. The birds of Japan, their status and distribution. Bull. Mus. Comp. Zool., Harvard coll., 109 (4) : 326~327.
- 平出種作 1943. クロサギの飼育観察. 野鳥, 10 (8) : 28~29.
- 清棲幸保 1952. 日本鳥類大図鑑II. 講談社 : 511~512.
- 小林平一、鳥居主計 1954. 本州に於けるクロサギ (*Demigretta sacra ringeri* Stejneger) の蕃殖について. 野鳥, 19 (3) : 222~226.
- 榎山徳太郎 1922. 邦領南洋諸島産鳥類. 日本鳥学会 : 42~56.
- Orn. Soc. Jap. 1958. A hand-list of the Japanese birds 4th & Rev. Ed. : 138.
- SEEBOHM, H. 1890. Birds of Japanese Empire. London : 220~221
- STEJNEGER, L. 1887. Review of Japanese Birds. Proc. U. S. Nat. Mus., (X) : 300~302.
- 内田清之助 1913. 日本鳥類図説上巻. 警醒社書房 : 99~100.
- 山階芳麿 1941. 日本の鳥類とその生態 第二巻. 岩波書店 : 949~954.

### Résumé

#### On Breeding of Reef Egrets on Jogashima

Toshi. SHIBATA

Hitoshi KANEDA

The island, Jogashima, is situated off the southern part of the Miura Peninsula, 400m off Misaki Harbour, in Miura city; it is 2100m from east to west 700m from south to north, and 30m in elevation.

On this small island the authors constantly observed five Reef Egrets from Dec. 1957; and in May, 1958 found four of their nests (A, B, C, D). The nests were in breaks of a large cliff, and in erosive caves, which were scarcely approachable.

Only in nest C they could be observed fledging but the Egrets of the other three nests A, B, and D, found breeding, gave it up.

The materials of their nests were directly brought from the land; and did not seem to be drifts.

There were 3 eggs in nest B the materials of which were mainly roots and stems of *Miscanthus sinensis* Anderss. var. *condensatus* MAKINO, *Pleioblastus Chino* MAKINO and *Chrysanthemum marginatum* MATSUM.

The Egrets began to make nest C toward the end of April; and their two broods were left there at the beginning of June.

The breeding of Reef Egrets on Jogashima examples the breeding habits of these birds when in the northern limitations of their natural habitat.

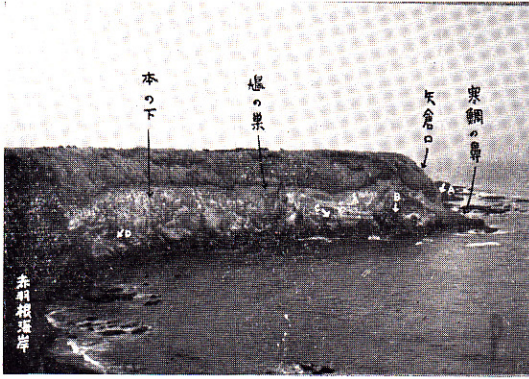


Fig. 3. 城が島のクロサギ棲息地 (矢印は巣の位置、断崖の黒点はウミウとヒメウ)  
Panoramic view of the habitat of reef egrets at Jogashima. (The white arrows indicate the place of their nests, Black spots on the cliff are cormorants and pelagic shags.)

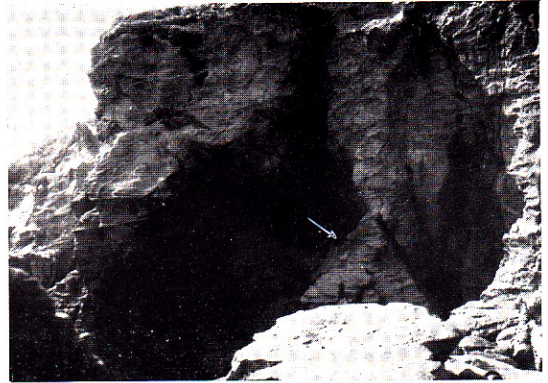


Fig. 4. A巢のある海蝕洞 (矢印は巣の位置)  
Erosive cave in which is nest A. (The arrow indicates location of nest.)



Fig. 5. B巢とクロサギ A. Reef Egret and nest B.



Fig. 6. A巢 (巢の位置より東側を望む) nest A.



Fig. 7. 採餌中のクロサギ 1958年7月 村山健治氏撮影  
Two Reef Egrets, Feeding.



Fig. 8. A巢 nest A.